

表Ⅲ-5. 95R-3放流群の追跡調査結果

調査日	経過日数	生残数	生残率(%)	死殻数	死亡率(%)
11月15日	(放流)	5,728			
11月15日	(夜間)	425	7.4	6	0.6+
11月24日	9	88	1.5	37+	1.5
3月7日、19日	113-125	1	0.02	85	

生残率・死亡率は、調査時に発見した個体数・死殻数から算出した見かけ上の値

2. ヤコウガイ稚貝の生息環境調査

(1) 目的

人工種苗の放流場所は、天然群の生息場に類似した環境を有したところが適地と考えられる。ところがヤコウガイの生態に関する知見は非常に少なく、今までにヤコウガイ稚貝が発見されたのは、鹿児島県の徳之島と沖縄県の阿嘉島¹⁾だけである。そこで、今後の放流場所選定の参考にするために、両島でヤコウガイ稚貝生息場の調査を行った。

(2) 方法

徳之島の調査は、1995年5月17日、鹿児島県栽培漁業センターの山中邦洋氏の協力を得て、北部の金見海岸で行った。調査時は、大潮干潮時で礁原部はほぼ干出していたため、礁原部を歩いての観察と、リーフェッジ周辺のシュノーケリングによる観察を行った。

阿嘉島の調査は、同年9月4日、熱帯海洋生態研究振興財団阿嘉島臨海研究所の下池和幸氏の協力を得て、西部のアゴノハマ湾口部礁原で行った。ここでの調査は、スキューバダイビングにより行った。

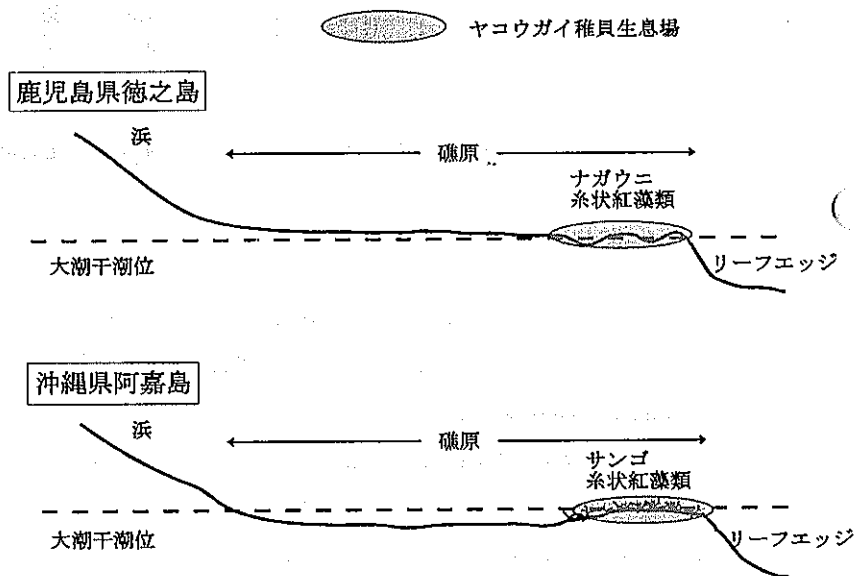
(3) 結果

徳之島はリーフの内側の礁池が発達せず、大潮干潮時には干出する礁原が浜からリーフェッジに続く地形が多い。礁原～リーフェッジのサンゴの分布量は少ない。ヤコウガイ稚貝は、ナガウニにより形成された割れ目や穴の多い、リーフェッジよりの礁原部に生息している。ここには、調査時アオサ類が繁茂していたが、その下には小型の紅藻類が生育していた。また、リーフェッジでも紅藻類が繁茂していた。

阿嘉島の礁原では、サンゴの生育状況は良好であった。礁原岸よりはやや深くなって、狭い礁池を形成している。

リーフェッジよりのやや盛り上がった礁嶺部では、サンゴが生育すると共に、基盤の石灰岩表面には、糸状・被覆状の紅藻類が繁茂していた。この礁嶺部でヤコウガイ稚貝が発見されている(図Ⅲ-5)。

両地点で、礁原の形状・サンゴの生育状況等に相違はみられるが、海底地形の複雑さ・紅藻類の豊富さは共通し、これらはヤコウガイ稚貝が生息するのに重要なファクターであると考えられる。



図Ⅲ-5. ヤコウガイ稚貝の生息環境